

## ◆執筆者一覧◆

---

### 1. 谷釜 尋徳 (タニガマ・ヒロノリ/法学部法律学科)

## ◆編集後記◆

---

『スポーツ健康科学紀要』18号をお届けします。刊行にあたりご尽力いただいたご関係各位に、厚く御礼を申し上げます。

さて、2020年度は、兎にも角にも新型コロナウイルスに翻弄された1年でした。いまでも世界中で混乱状態が続いています。

一般に人類は、見慣れない事物に対して怖れの感情を抱き、すでに作り上げてきた枠組みが崩れるような事態は好まない性質を持つそうです（『知的好奇心』中央公論新社、1973）。しかし、最初の緊急事態宣言下の4月、絵本作家の五味太郎氏は、新聞のインタビュー記事の中で次のように話しています。

「ガキたちには、むしろこれがチャンスだぞって言いたいな。心も日常生活も、乱れるがゆえのチャンス。……だって、学校も仕事も、ある意味でいま枠組みが崩壊しているから、ふだんの何がつまらなかったのか、本当は何がしたいのか、ニュートラルに問いやすいときじゃない？」

（『朝日新聞』2020年4月14日 朝刊）

“自粛期間中”にこの記事と出会い、大きく心が揺さぶられました。未曾有の混乱をもたらす新型コロナウイルスとは、物事の本質を問い、答えを出そうとするチャンスにもなり得るのだ、と。同じ記事の中で、五味氏はこうも語っています。

「コロナの前は安定してた？居心地はよかった？普段から感じてる不安が、コロナ問題に移行しているだけじゃないかな。こういう時、いつも『早く元に戻ればいい』って言われがちだけど、じゃあその元は本当に充実してたの？と問うてみたい。」（出典は同上）

どうやら、コロナウイルスという強敵は、人間がフタをしてきた数々の問題を丸裸にするワザを持っているようです。

折しも、東日本大震災の発生から10年という節目を迎えました。あの時も、スポーツをすること自体の是非や、スポーツの持つ底力を深く問われたことが思い出されます。

コロナが暴いた「スポーツは不要不急か？否か？」という究極の宿題に、それぞれが向き合い、「哲学する」必要がありそうです。

今後、こうした熟考を経た多様な研究成果が、本誌に続々と掲載されることを願って止みません。

（谷釜 記）

2020年度「スポーツ健康科学紀要」編集委員

委員長 谷釜 尋徳（法学部）

委員 塩田 徹（経済学部）

委員 西村 忍（経営学部）

委員 一川 大輔（理工学部）